

ゴミ、捨てんなよ!



*The wisdom under the Tree.*

# ソトコト編集長の水循環論



# 父と母、子の水循環

























































































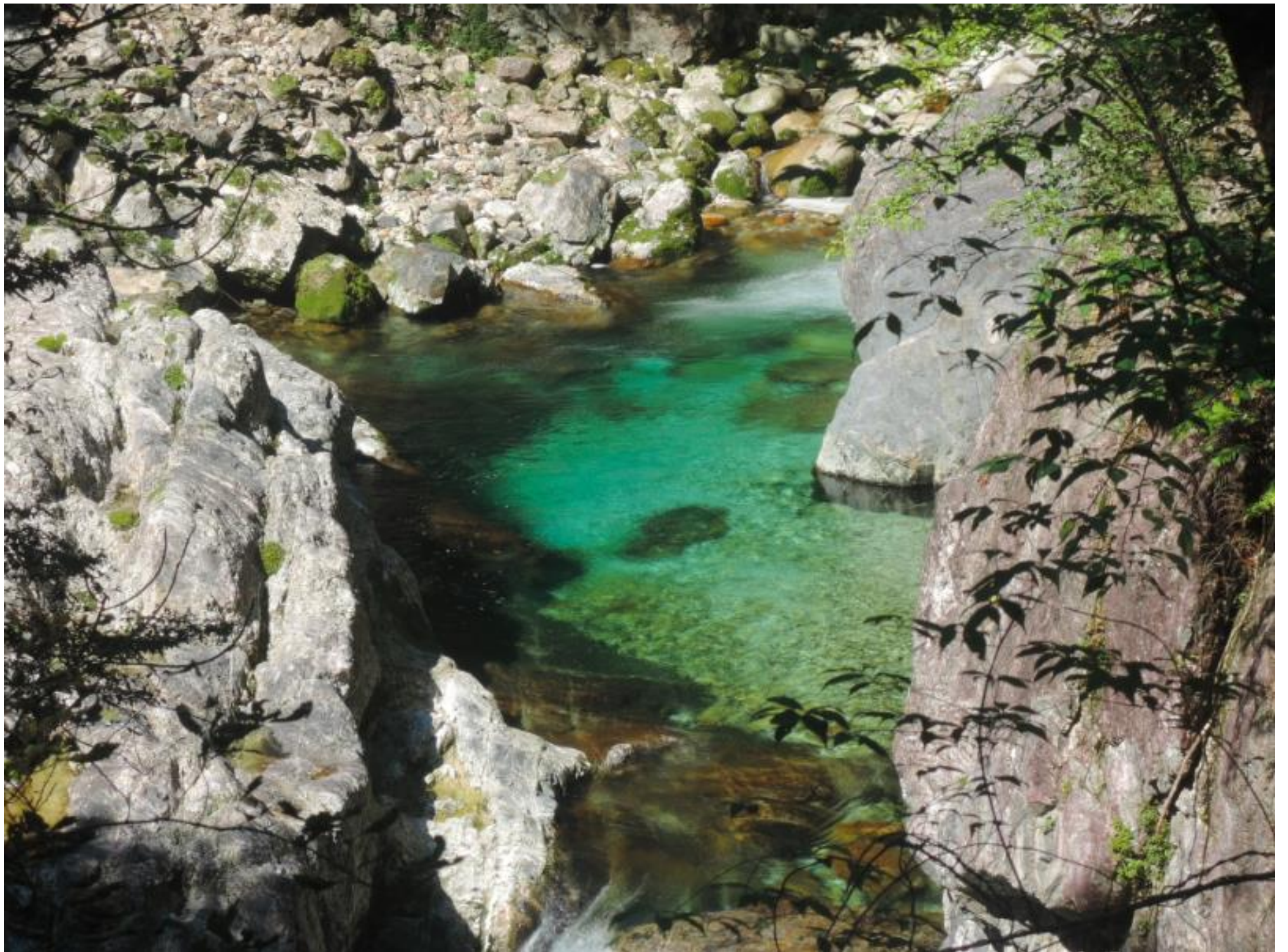
# 若者たちの水循環





























































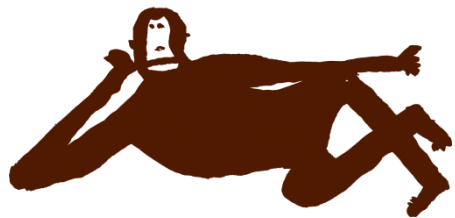




# 地元を愛する水循環



ゴミ、捨てんなよ!









































# 源流点で学ぶ水循環





















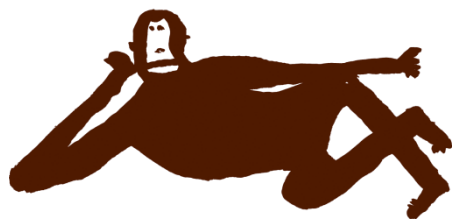




# 水循環の場所づくり



ゴミ、捨てんなよ!





滋賀県  
長浜市からはじまる、  
ソーシャルな  
うねり。

# 「どんだん橋プロジェクト」、スタート！

滋賀県長浜市街地とある路地裏に、コンクリート製の小さな橋が架かっています。  
その橋のもとにある長屋2軒分を改装し、農家や建築家がシェアするプロジェクトが始まりました。

photographs by MOTOKO text by Hisaki Inoue

## 小さな橋のもとで町の「ストック」を発見

滋賀県長浜市は、秀吉が初めて築城した長浜城の城下町。賑わいがあつた水路や昔ながらの町並みが美しい。琵琶湖北東部に位置することから、この地域は湖北と呼ばれる。北国街道と大手通りが直交する界隈は、町家が軒を連ね、民家や商家として実際に利用されている。町の中心部から徒歩10分ほどの場所に面したコンクリート製の橋がある。かつては木製で歩くときに弾むような音がしたことから「どんだん橋」と呼ばれている。その橋のもとにある築80年ほどの長屋をリノベーションし、シェアスペースとして使うプロジェクトが進行している。その名も「どんだん橋プロジェクト」。

化や自然に魅了されていく。なかでも、琵琶湖を含む生態系や、そこに結み合う人々の生活が新鮮だった。「僕の育った町には長浜ほどの古い町並みが残っておらず、ここに来て

エキゾチックな気持ちになった」。外からの視点で長浜を見渡すと町や人の「ストック」がたくさんあつた。長年人が営み、語り継いできたものだ。たまたま、その「ストック」も経

済活動の外にある古い家々はないがしるにされてきた。町の中心地にある古い家々には、キッチンやトイレが吹きさらす機会を与えられたが、中心地から離れると朽ち果てていく。しかし、

ただいま「シェアスペースどんだん」を建築中。  
長浜には、こんな動きが次々と生まれつつあります！



●築80年ほどの長屋、ワークショップをしながら改装を進める予定だ。●杉材の柱が「根柢」された形跡。この時は水害が多く、先人たちは水を直して長年使ってきた。「何故も壊しながら使ってきた」と竹村さん。●川のそばに建ち並ぶ長屋が物件。川のそばにはイチジクの木も。



高層に建てる家も改装して、人が集う場所になればまた息を吹き返すのではないうか。竹村さんの周りには仕事や遊びでつながった農家、建築家、デザイナーなどの仲間たちがいた。「彼らが集える活動拠点をつくりたい」。『みだて農園』の立見夫妻は以前から食品加工をする場所があればいいと考えていた。「一人でつくれば数百円の出費。加工所がほしいけれど、投資に二の足を踏む農家が多い」と立見夫妻さんは言う。キッチンスペースや必要な機材を置けば、農家が使えるシェアスペースとして使える。販売も可能だ。設計士の佐野さんも途中で事務所を構えたいと思っていた。「だったら、共同オフィスとして使ってみたら」と考えた。佐野さんには事務所兼店舗もしてもらえます」と竹村さんは微笑む。町の上の世代たちからは「ここまで傷んだ建物を改修する意味がわからん」と笑われた。けれど、価値観は違っても若者も年配世代も「長浜らしさ」が大切と。今まではその言葉の意味に世代間の隔たりがあった。そろそろ同じ湖北像を持つべき時代がきているのかもしれない。

加工所ができるのが楽しみ！



立見 実さん  
「みだて農園」の食品を使った料理や加工、ワークショップなどを企画中。

おいしい米を売りたい。



立見 実さん  
「みだて農園」代表。米農家。西日本有数の米産地・長浜の米をここから発信。

年中地元野菜が買える場所に。



七瀬 健太さん  
「はなの森農園」代表。地元野菜の産地。40品種の野菜が買える新しい野菜を販売予定。

長浜の魅力をウェブで発信。



村上 明一さん  
長浜を伝えるWebマガジン「ナガシン」代表。ウェブを通して活動や情報を発信。

店舗兼建築家です。



佐野 元樹さん  
設計士。「MAFIS, design」代表。完成品「ショップスペース」をデザイン。不動産業にも。

大層生産と消費の次の社会を！



福高 雅之さん  
デザイナー。アパレル業界から転身。ショップ立ち上げのノウハウを分かす。

老若男女が集える場所をつくる。



竹村 晃雄さん  
「東海まちづくり株式会社」代表。外資系で長浜を愛する。その魅力を発信。



こちらが、どんだん橋！

どんだん橋の上に立つ「どんだん橋プロジェクト」のメンバー。さて、これからどんな物語が生まれるか、もうご期待です。

## 滋賀県長浜市の水辺まちづくり in 東京

美しい水辺のまちづくりが注目される長浜。「どんだん橋プロジェクト」のメンバーとともに、長浜の魅力や、これからのまちづくり、ローカルの可能性を語るイベントを開催します。長浜のおいしい食べ物をご用意して、みなさまのお越しをお待ちしています！

日時／2016年3月6日(日) 15:00-17:00  
場所／東京・有明「コハスカフェARIAKE」  
(武蔵野大学キャンパス内)  
tel. 03-3549-1011 (ナコト編集部)

ファシリテーター／梅田一正(ナコト編集部)



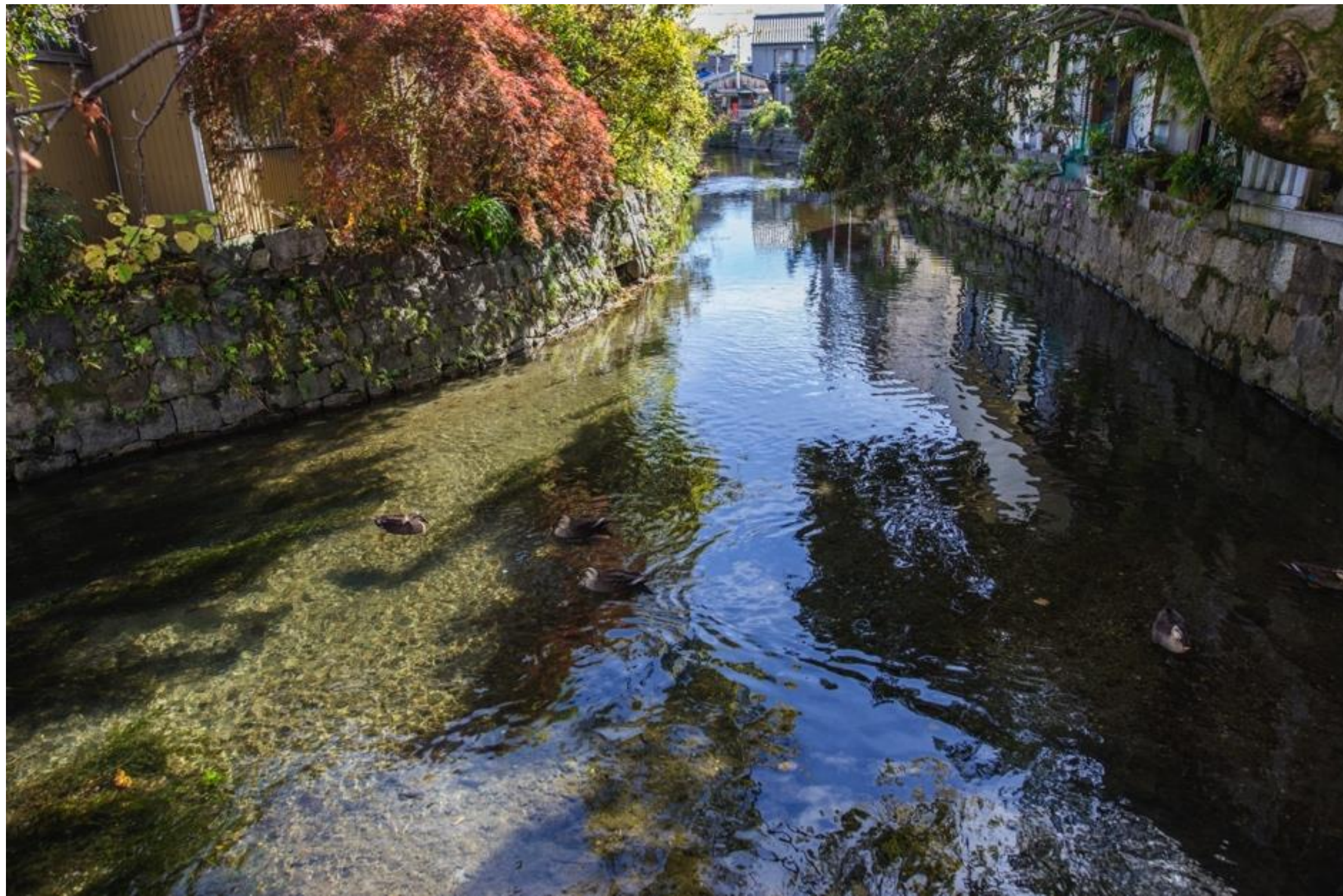
●民家の影を流れる米川。大雨などで水量の多い時季にはいまだにあふれることもあるそう。●東々の裏には水路とつながる出入り口がある。かつては米や野菜などを売りに来る商人が舟で訪れたという。

と竹村さんは指摘する。その「長浜らしさ」を表現するのが、人が集い、ナリワイをつくる「どんだん橋プロジェクト」だ。間もなく、橋を渡り、たくさんの方が訪れる。































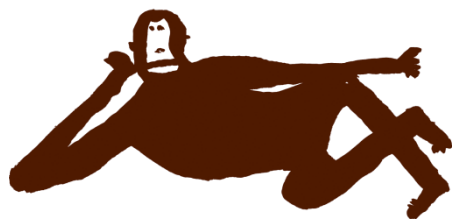




『U・STYLE』の、  
新潟らしい表現力。



ゴミ、捨てんなよ!





イなどが盛んに取獲された湖での漁業も行われなくなった。

その後、下水道の整備や「鳥屋野湯漁業協同組合」の環境改善活動によって湖の水質は向上したが、人々と湖の距離は開いたままだった。ディレクターで、和菜の次男の松浦修太郎さんも、「『ビッグスワン』にサツカーを親に行うことはありましたが、湖には立ち寄りませんでした。湖で遊ぶこともなかったです」と子どもの頃の印象を語る。「護岸整備がされていない

## 新潟県新潟市の鳥屋野湯。 ハクチョウの飛ぶそのほとりに、 素敵なデザイン会社があります。

仕事に携わったことから鳥屋野湯に関心を持ち、2015年に現在の場所に事務所を移転した。「昔の鳥屋野湯は、漁をしたり、泳いだり、カップルはボートに乗ってデートを楽しんだり、豊かな自然の暮らしがあったことを知りました」と代表の松浦和菜さんは言う。ただ、高度経済成長期に急増した住宅からの生活排水などによって、水面上に洗剤の泡が立つほど鳥屋野湯は汚染されてしまった。水辺から人々の笑顔は消え、ウナギやコ

ので、水辺に近づくこともできませんでした」と和菜さんも言う。そんな鳥屋野湯のネガティブなイメージをデザインの力で「新しい、再び人が集まる鳥屋野湯になるように」と、『U・STYLE』は鳥屋野湯の歴史を語り継ぐための「湯ボーイズ」というリトルプレス制作を始めた。創刊号を発行後、反響を呼び、鳥屋野湯関連の仕事が徐々に増えてきたため、利便性も考えて事務所を湖の近くに移転した。2号の「湯ボーイズ」に加え



「U・STYLE」の一室。代表の松浦さん（右前から2人目）を含め11名のスタッフが和やかな雰囲気で作業。

市街地の鳥屋野湯から、山間地、大原集落へ。

新潟県新潟市の市街地に静かにたたずむ鳥屋野湯。冬になると4000羽を超えるハクチョウが飛んでくる大きな湖だ。その鳥屋野湯のほとりに、デザイン会社『U・STYLE』は事務所を構えている。以前は市内の別の場所に事務所があったが、鳥屋野湯を舞台にしたイベントの

## 特集 Local Design 2019 地方のデザイン 2019



鳥屋野湯のほとりに立つ『U・STYLE』の事務所。ここから「新潟らしい」デザインが生まれている！



## デザインで幸せをつくる。 『U・STYLE』の、新潟らしい表現力。

日本各地それぞれのローカルならではのデザインがある。新潟もそうだ。そこにはおそらく、新潟の歴史や文化、自然やライフスタイルなどが反映されているに違いない。気鋭のデザイン会社『U・STYLE』は新潟の何を大事にしながらデザインしているのだろうか？ 訪ねてみた。

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui



ハクチョウやカモが飛来する冬の鳥屋野湯。サッカークラブ「アルビレックス新潟」の本拠地「ビッグスワン」も近い。





### 麹チーズ ケーキ

大原産の玄米甘酒や無農薬干し柿など地域の素材を原料にしてデザインを施し、販売。地域の農家とのコラボレーションの場。

### ŌHARA CRAFT

終太郎さんたちが大原集落の棚田で育てたコシヒカリを使って醸造したローカルクラフトビール。「渇マルシェ」でも販売。



遊びに  
来て!

すくすく、山のデザイン。



### 大原事務所

人が集まれる場づくりとして大原集落の祖父母の家をリノベーション。地元の大工さんの協力を仰ぎながら2階に事務所、1階にキッチン設けた。19年に本格始動!



### 大原の田んぼ

上越市の大原集落で終太郎さんが仲間を誘って行っている米づくり。「山のデザイン」の原点とも言えるプロジェクト。

然環境に負荷を与え、世界の見知らぬ人を不幸にしてはいけない。楽しく暮らしながらも生活の背景にあるものに目を向けるという姿勢を「渇マルシェ」から学びました。その学びを、押しつけるのではなく、ゆるやかに提案する場として「渇マルシェ」をデザインしています。

終太郎さんをはじめ、スタッフ全員が仕事から得た経験を生かして、「U-STYLE」は今、中山間地域の活性化にも挑戦している。上越市安塚区大原にある祖父母が暮らす家をリノベーションし、そこを拠点にしながら大原集落をデザインの力で元気づけようと取り組んでいるのだ。大原は、和さんの生まれ育った集落でもある。「子どもの頃、雑木林で駆け回って遊んでいた。でも、今や集落の人口は五十数人、安塚区でも2400人ほど。高齢化し、限界集落になりつつあります。それも時代の流れだと諦めることは簡単ですが、私は嫌。自然との関わり方や暮らしの知恵をデザインし、人が集まる魅力的な場づくりを行っていきたいです」と和さんは話す。大原で得られた地域活性の知見を、いずればほかの中山間地域にも展開していきたいと意気込む。

「U-STYLE」の事務所はテナントだった建物を借り受けたもの。木の温もりを感じる室内やテラスに、社員やインターン生のセンスで様々な装飾が加えられている。



### 渇のしずく

新潟の郷土玩具「三角だるま」をリ・デザイン。季節や地域に合わせた新たなデザインを加え、職人とともに文化をつくる。



### 渇ボーイ's&渇ガール's

「U-STYLE」が鳥屋野湯に関わった初期の頃からの作品。古き良き鳥屋野湯を知る祖父母世代や鳥屋野湯をフィールドに活躍する若者取材。

鳥屋野湯  
好き!



ひろびろ、渇のデザイン。



### キッチントラックMullet

子育て奮闘中の社員・江花望伊さんの柔軟な働き方を整えるために導入されたMullet(マレット)。ユスリカの森に出走。



### webデザイン

県内の企業や学校などのwebサイトのデザインも多く請け負う。地域に密着した仕事ぶりは高い評価を得ている。



### とやの渇アウトドアピクニック

キッチントラックMulletが中心となり、平日に親子で過ごす場を提供。鳥屋野湯の自然を楽しむワークショップも開催。



### 渇マルシェ

鳥屋野湯のイメージを一新したイベント。5月から10月の第2日曜に開催するオーガニックなマルシェ。カヌー体験も実施。



### とやの渇ウィンターキッチン

鳥屋野湯の漁師が捕った魚などを使い、飲食店が独自のメニューを考案し、味わう。料理教室「こどもキッチン」も開催。

地域のコミュニティを大切に  
生み出される、  
やさしさあふれる  
デザイン。

みんなが仕事に集中すると、事務所は静かな雰囲気。20代、30代の「新消費」を持った若い世代が、デザインの方で地域の新しい価値を創造する。





ローカルの仲間や先輩たちとともに、その表現力はパワーアップしていきます！

## 新潟も東京も、同じ「ローカル」と捉える。

鳥屋野湯や大原集落の地域の人々の協力を受けるながらデザインの仕事を行う「U・STYLE」。「ソトコト」編集局が運営し、全国の地域の仕事を紹介する求人サイト「イタ」のデザインも手がけている。webディレクターとして関わる松太朗さんは、「編集長の指出一正さんが、『昔、私鉄の駅にべった伝言板や、雑誌の後ろのページに掲載されていた「ローカル求む！」みたいな3行広告のイメージでつくりたい」と。僕が学生の頃に住んでいた東京・下北沢の駅前に伝言板があり、あのぶつさらばうな書き感が好きでした。それを思い出しながら作業しています」と話す。制作担当のデザイナー、新保貴さんは、「写真も使わず、モノクロで、文字の書体や組み合わせだけでデザインするのが楽しいです。キャッチコピーを決めるときも、仕事遊びがわからないほど盛り上がり。普段着のままデザイン

ンしています」と笑顔で話す。そんな松太朗さんに、新潟と東京のデザインを比較することはあるかと尋ねると、「それはないかも。新潟も東京も同じローカル。対極的には捉えていません」とのこと。新保さんも、「就活をしていた頃、東京に出

# イタ

まちづくりとまちごとの求人サイト『イタ』。

LOCAL WORK & PLACE

### ロゴデザイン

求人サイト「イタ」のロゴマーク。新保さんの手書きを元にデザイン。ゆるくて整っていない書体が「イタっほいでしょ?」。

# イタ イタ

LOCAL WORK & PLACE LOCAL WORK & PLACE

### ロゴ試作

ロゴマークはwebサイトのコンセプトを示す重要なアイコン。「あでもない、こうでもない」と試作され、最終的に昇華されていった。

チッワッ  
いっほい

宮城県 新庄市  
**10人10個 誘惑の**  
あたらしい仕事づくり  
2018.11.01 UP

宮城県 仙台市  
東北の  
**ミライ**  
近道  
こちらが  
2018.11.14 UP

新潟県 十日町市  
食う寝るところに  
住むところ  
心配ないさ〜  
**バイバイ**  
2018.11.22 UP

宮城県 仙台市  
**扇風琴を弾いてみよう!**  
2018.11.01 UP

新潟県 新潟市  
**アバンギャルドな夜のお仕事**  
2018.11.01 UP

### パネルデザイン

紹介する地域の仕事に合わせてさまざまな書体を駆使し、キャッチコピーをデザイン。コピーは「ソトコト」編集部と「U・STYLE」の合作も。パネルをクリックすると求人概要が現れる。

### スケッチ

試行錯誤した様子が窺い知れるスケッチの山。松太朗さんと新保さんがメインとなって、「イタ」のユニークな求人情報を発信中!



● 県立鳥屋野湯公園を管理する浅野涼太さん。● 鳥屋野湯漁業協同組合代表理事の増井勝弘さん(左)と理事の大野康幸さん(右)。冷凍ボラをもらって笑顔の松太朗さん。● 裏庭で投網の熟練技を披露する増井さん。

ようかと考えましたが、サッカ―選手の三浦知良の「日本も世界だ」という言葉に触発され、「新潟も世界。東京と同じ、いやそれ以上のデザインができるはず」と思い直し、新潟に残りました」と話す。

そんな「U・STYLE」のデザインによって、「新潟に暮らす人たちの顔が生き生きするようになればうれしい」と松太朗さんは言う。和美美さんは、「新潟は小さな地域の集合体。集合体を支える一つの細胞が活性化するというデザインを心がけたいです」と。鳥屋野湯も大原も、新潟、そして世界をかたちづくる一つの細胞。細胞が生き生きとしているからこそ、世界は元気でいられるのだ。

「U・STYLE」代表 松浦和美さん

### 地方のデザイン3か条

1. 地域の素材を結びつける。  
地域の素材を掘り起し、人や自然環境や歴史などいろいろなものと結びつけ、新しくデザインし発信する。
2. 山間地や僻地の文化に着目。  
新潟はほとんどが山間地や僻地。そうした地域で生き生きと暮らす人たちの豊かな文化を引き出す。
3. 「らしさ」を大事に。  
その人らしさが発揮できた仕事は結果的に質の高い仕事になっている。だから新潟も「新潟らしく」ありたい。

### スタッフのみなさん、新潟の仕事はどうですか?

1 クライアントの本心を読み取って、デザインに表現すること。  
2 ふたりの子どもたちにパパの作品とデザインに表現すること。  
新保貴さん  
チーフデザイナー  
「新潟も世界」と、新潟に残留。

1 自分らしくいること。自分の感性が表現できれば、そこに価値はない。  
2 人と人、場や環境も掛け合わせ、新しい価値を創造する。  
松浦和美さん  
ディレクター  
奥深い思考で仕事を見る。

1 それぞれの仕事が相互的に作用していることに気づくこと。  
2 大原集落のプロジェクトをやり立って育てたい。  
松浦和美さん  
代表  
生まれ育った大原集落を元気に!

Question 1  
「U・STYLE」の仕事で大切にしていることは何ですか?  
Question 2  
これからやってみたいことは何ですか?

1 クライアントをよく知ることで、劇場の仕事では、クラシックを初めて聴くこと。  
2 入社して3年。何でも任せてもらえるデザイナーになりました。  
法輪彩香さん  
デザイナー  
主に小嶋子など紙媒体を担当。

1 失敗してもポジティブに捉えて、仕事を楽しくように。  
2 人として成長できるような、心を動かす仕事をしたい。  
清水和さん  
デザイナー  
仕事を覚えていく最初の1年目。

1 クライアントの要望以上の予想を超えるものを提案できるように。  
2 海外も含めて、新潟以外の地域の仕事もしてみたい。好奇心旺盛なので。  
藤田はるかさん  
デザイナー  
「引き出し」を増やそうと奮闘中!

1 現場に足を運び、感じたことをデザインに落とし込む。  
2 珍しくまちなかにある鳥屋野湯の新たな価値を見出したい。  
関倉寿枝さん  
デザイナー  
10年間、東京のデザイン事務所。

1 Mulletの食材や調味料は、なるべく地産地消のもの調達。  
2 発信力を高めながら、地域の魅力を伝えたい。商品展開。  
江花望伊さん  
ディレクター  
Mullet担当の働くママです。

1 クライアント、地域、「U・STYLE」の価値になるものを提供したい。  
2 多様な生き方が認められる社会を、デザインの力でつくりたい。  
植木陽香さん  
ディレクター  
ディレクターの姉妹さんの奥さん。

1 趣味の映画や旅行から、デザインに役立つものを取り入れたい。  
2 自分がつくったものを、多くの人が使っている風景を見たい。  
村山瑞季さん  
デザイナー  
ワイナリーのPR誌などを担当。

1 仕事を俯瞰的に見て、クライアントの望むものを提案する。  
2 担当する大原の未来を創るため、メッセージ性をもって取り組む。  
松浦裕馬さん  
ディレクター  
最出は、週2、3日は大原へ。



## 水循環を広める ソーシャルな視点

1. 関係人口を増やす
2. 未来をつくっている手応え
3. 「自分ごと」として楽しい



ソーシャル&エコ・マガジン

未来をつくる仲間が増えています!

# ソトコト

ありがとう20周年!!

# 20祝



ゴミ、捨てんなよ!



## ゴミ、捨てんなよ!

